Japanese Association for Religious Studies

パネルの主旨とまとめ

狭間芳樹

東アジアにおいてキリスト教が受容され、新しい形態が生み出される際、受容者側の伝統思想がはたしてどのように機能しているのか。日本の場合、「武士道」と称されるものがそれであり、なかでも新渡戸稲造の *Bushido* 刊行以降、明治期キリスト者によって案出されたキリスト教受容の土台としての武士道という論調は今日おおよそコンセンサスを得ているように思われる。しかし元来武士道という語が非常に多義的に語られる上、その理解に一定の曲解が孕まれていること、さらにはそもそも伝統思想と位置づけられるものであるのかといったところには議論の余地がある。そこでこうした関心に基づき「アジア・日本のキリスト教と宗教的多元性」研究会に属する岩野、方、狭間の三名は、各自の論点から武士道概念をあらためて検証し、厳密に捉え直すことにより「キリスト教と武士道」という構図に対する従来の見方を越えうる新たな視点の提示を試みた。そして議論を敷衍すべく、東馬場氏には比較宗教学の立場から理論的な分析を、また非受容者（宣教）側の視点を網羅する目的から、コメンテータを非会員の浅野淳博氏（関西学院大学・聖書学）に、それぞれお願いした次第である。

発表内容は各々の要旨にゆずり、以下、浅野氏のコメントに依拠して本パネルを通して浮かび上がった特に重要な論点を記す。氏からは先ずパネル全体の議論にとって前提となる武士道の定義自体の曖昧さが指摘された。確かに新渡戸や内村が、たとえば「理想的日本」という漠然とした曖昧な理念を武士道という曖昧な表象で言い表そうとした結果、不得要領に陥っている面は否めない。しかし東馬場氏から提起されたように、新渡戸のそれが発見ではなく発明された武士道であるとの視座に立つならば、明治期キリスト者たちの念頭にあった武士道が曖昧であるとは必ずしも断ぜず、厳密に規定することが可能であるというのが本パネルのスタンスである。またフロアからは、新渡戸自身の武士道理解がどうであったのかというのとは別の視点、すなわち新渡戸の言説に対する社会の感受の有り様、日本における幾度かの武士道ブームという面から伝統思想について考察する視点も必要なのではないかとの意見が出された。この点については、曖昧な概念が社会のなかで時代性を伴い、特定の意味内容に収斂した結果、伝統思想として措定されてきた現象を読み解くためにも、キリスト教的武士道理解、あるいは歴史的武士道からの変容を明らかにすることが本パネルの目指すところであった。充分に議論を深められなかった点は今後の課題としたい。

その他、浅野氏からは、内村や新渡戸においては「義 righteousness」と、その派生概念である「忠義 loyalty」とがいささか混同しているように見うけられるとの指摘をはじめ、新渡戸の「義」がパウロ的理解を前提としているならば、ここでの議論において本来的に齟齬をきたすこと、韓国では伝統思想としての儒教が如何にとりこまれているのかについてさらなる言

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

及を要すること、また殉教精神の純粋性については武士的精神の純粋性を単に批判的に読みこむだけではなく今一度批判的に再考すべきであるといった示唆を受けた。比較論に関しては、釈義学上、比較自体が「意味領域の重なり」をはかるものであるとのコメントを受け、発表者からは、比較というものがただ理解や解釈のためだけではなく説明の道具としても使われるとのレスポンスがなされた。さらにフロアからは愛や平民道への射程に関わる質問なども出され、そうした議論のなかで本パネルの意義がいっそう鮮明となった。

キリスト教思想の新しい可能性
——「宗教と科学」の問題圏より——

代表者　芦名定道
コメンテータ・司会　今井尚生

科学と神学
——対話の地平——

濱崎雅孝

本発表のテーマは「科学と神学の対話」である。ここでまず、そもそも科学と神学が対話をする必要があるのか、という疑問が生じるかもしれない。神学の側に立てば、神学の学問性を証明するために科学との対話が必要であるということになるだろう。科学の側に立つと、現代において近代科学の方法論が根本的な欠陥を有していることが明らかになっているため、科学がこれまで排除してきた領域（宗教もその一つである）を見直す必要が生じてきたと言ってよいだろう。この二つの必要性は、根本においてつながっている。すなわち、神学の学問性を問うということは、単に神学と科学の共通点を挙げるということではなく、近代科学の限界を乗り越える手段を神学は提供できるのかと問うことでもある。

次に、科学と神学の対話を可能にするための地平がどこに開かれるかを考える。一般的には、科学の出発点となる経験は客

NII-Electronic Library Service